

## 講 演

# 8歳の記憶「ヒロシマ」

広島被爆体験証言者 八 幡 照 子

(講師紹介：本日は、被爆体験証言者として活動を続けておられます八幡照子さんにお越しいただきました。八幡さんは8歳の時に広島で被爆されました。2013年から外務省の非核特使として委嘱を受けられ、ピースボートの被爆者地球一周証言の航海にも参加されています。また、80歳を過ぎてから英語の勉強を始められ、海外からの訪問者に向けて英語での証言も行っておられます。本日はオーストラリアでの証言活動から戻られたばかりの中、お話しいただきます。それでは八幡さん、宜しくお願いいたします。)

## はじめに

皆さん、こんにちは。被爆体験証言者の八幡照子と申します。本日はよろしくお願いいたします。

今日は、広島から被爆したおばあちゃんが、のこのこと東京に寄せていただきまして、このような立派な大学の優秀な皆様の前で証言をさせていただくということで、大変光栄に思うと同時に、不安な気持ちでいっぱいですが、一生懸命お伝えしたいと存じます。

これから見ていただくパワーポイントについて少し説明させていただきますね。写真や地図のほかに「原爆の絵」が出てまいります。これは私が描いたものではなく、広島市立基町（もとまち）高校の美術部の生徒さんたちが描いて

くれたものです。生徒さんたちは原爆のことなど何も知りません。しかし、被爆者の話を聞いて、何度も何度も描き変えて、約一年かけて私の記憶を形にしてくれました。これからの話の中で出てまいりますので、どうぞご覧ください。

## 軍国少女だった日々

私が原爆を受ける前、私たち日本の子どもたちがどんな生活をしていたか、そこから話したいと思います。

私は大阪で生まれ、神戸で幼い日々を過ごしました。父の転勤が多く、父が満州の天津に転勤になったのを機に、私たちは広島のおばあちゃんのところに家族で引っ越しました。原子爆弾が投下される約1年前、私は広島市立己斐（こい）国民学校に入学しました。国民学校というのは今の小学校のことです。待ちに待った入学式の日、校門を入ると桜が満開でした。時折吹く風に花びらがひらひらと舞って、地面を薄桃色に染めていきました。学校は毎日楽しかったです。「みんなでべんきょううれしいな、こくみんながっこう一年生」と声を張り上げて歌った音楽の時間、初めての勉強、すべてが輝いていました。

そして初めての遠足、忘れもしません。お弁当箱の半分にはうずら豆の入ったご飯、もう半分には何が入っていたと思われませんか？ 今の皆さんの遠足のお弁当とは大違いです。なんと、サツマイモを蒸したのがゴロンと入っていたんです。戦争によって食糧事情がだんだん悪くなり、子どものお弁当にも影響を及ぼしていました。家庭では「すいとん」という団子汁や、少しのお米に水や野菜をたくさん入れてカサ増しした雑炊が主食でした。

ラジオからは毎日軍艦マーチが流れて、「大本営発表！」と戦争の結果を伝えます。「我が軍の損害なし」「敵空母撃沈」と、決まって日本の優勢を伝えるのです。これは今思えば虚偽の報告だったのですが、国民の多くは「欲しがりません勝つまでは」を合言葉に、日本の勝利を信じて疑いませんでした。

しかし、学校生活も次第に戦争の色に染まっていきました。運動会の綱引きの綱を「お国に供出」と言って差し出さなければならなくなりました。秋晴れ

や五月晴れの爽やかな運動会ではなく、雲が低く立ち込めたとても肌寒い日で、綱とのお別れが悲しかったことを今も覚えています。

そして上級生、つまり6年生たちは、毎日歌いながら運動場を行進していました。「命一つをかけがえに、百人千人斬ってやる」と毎朝行進するのです。どういう意味かお分かりでしょうか。硫黄島やサイパン島、沖縄が敵の上陸によって陥落しました。今度は日本本土に敵が上陸してくるかもしれない。そうしたら命を捨てても、100人でも1,000人でも斬ってやるぞということを、小学生のうちから教えられていたのです。もう戦争末期ですから武器などありません。竹の先を尖らせた「竹槍」で、もしも敵が上陸してくれば、命を捨てても戦うことを決意し、毎朝毎朝歌っていました。当時2年生、8歳だった私の頭にもその歌が染み付いて、こんなおばあちゃんになっても口をついて出ます。

8歳の私がとても衝撃を受けた話があります。皆さん、「特別攻撃隊（特攻隊）」の話をご存知だと思います。爆弾を抱え、飛行機ごと敵の船艦に体当たりするという悲壮な作戦です。命を捨てても祖国や愛する家族を守るために、多くの若者が志願していきました。しかし一方で、人生の夢や希望を断ち切って命を失っていく若者の悲しみはいかばかりだったでしょう。私は戦後75年も経ってから、特攻隊員たちが飛び立っていくのを見届けて生還した方から話を聞きました。

志願は美談ばかりではなかったのです。17歳から20歳過ぎの若者が集められて、「特攻隊に志願する者は一歩前に出る」と上官が言うと、みんな一歩前に出たそうです。でも、残っている少年が一人いました。「貴様はなぜ志願しないのか」と問われると、彼は「自分は農家の一人息子であります。年老いていく親を残していくことはできません」ときっぱり言ったそうです。そうしたら「貴様はそれでも日本男児か」と、意識がなくなるまで殴られ、とうとう志願させられて飛び立っていったといえます。

「いつまでも、いつまでもお元気で」。特攻隊員たちが残した最期の言葉に、私は限りない感謝と平和への決意を込めて、今も胸に残る一節があります。♪ 神風（しんぷう）特別攻撃隊 ♪ 今にして思えば絶望的な戦争末期だったので

す。

## あの日、1945年8月6日

そして、あの日。1945年8月6日。爆心地から2.5キロ離れた己斐本町（こいほんまち）の自宅には、ひいおばあちゃん、おばあちゃん、両親と姉、私、そして弟2人の8人がいました。空は晴れて爽やかな朝でした。私は小学2年生の夏休みでした。

朝から警戒警報が鳴っていました。警戒警報というのは、敵機が近づいたから警戒して防空壕に入る合図です。私たちは綿の入った防空頭巾を被り、大事な救急袋を持って避難します。広島はそれまで大きな爆撃を受けたことがありませんでした。警報が鳴っても偵察機がすぐいなくなる程度で、これを不思議に思った人はいたでしょうか。子どもだから何もわかりませんでした。

警報が解除になったかどうか、朝早かったので聞き漏らしてしまった私は、「隣のとっちゃんのところに聞いてくるね」と言って、裏庭に降り立った、まさにその時です。

「ピカーッ！」

空一面が光りました。ものすごく青白い光。当時はありませんでしたが、まるで空全体が巨大な蛍光灯になったようでした。私はびっくりして、毎日練習していたように、目と鼻と耳を塞いで地面に伏せようとした瞬間、意識を失いました。

「みんな、ここに集まりなさい！」意識朦朧とする中、母の叫ぶ声を聞きました。気がつくと、私は裏庭にいたはずが、廊下と6畳と8畳の間を超えて、5、6メートル吹き飛ばされ、家の中に倒れていました。机の隅にうずくまって頭がガンガン痛みます。母の声を頼りに這い出してみると、倒れた襖に廊下のガラス片が一斉に矢のように突き刺さり、家の中は家具が倒れ、食器が散乱し、襖も障子も倒れて、足の踏み場もないほどひっくり返っていました。

父は、崩れかかった階段を登って、2階の屋根が吹き飛び部屋の隅に吹き飛ばされていたひいおばあちゃんを背負って降りてきました。母は押し入れから冬の大きな布団を引きずり出して、集まった家族の上に広げながら悲壮な声できっぱりと言いました。「みんなで死のう。みんな一緒よ」母は今まで経験したことのないこの状況に、ただならぬものを感じたのでしょうか。第二、第三の攻撃があったらとても助からない。それなら家族バラバラにならないで一緒に死のうと言って、私たちを布団でくるんでくれたのです。

布団を被り、肩を寄せ合ったあの時の家族の温もり、子ども心に感じた家族の絆を、私は今も忘れません。家族っていいですね。優しくて温かくて、ちょっぴり厳しくて、かけがえのない存在です。

一体何が起きたというのでしょうか。原子爆弾は、35万人が住む広島市上空600メートルのところで炸裂しました。爆発の瞬間、マグネシウムを焚いたような強烈な閃光が放たれ、同時に空に巨大な火球が現れました。その中心温度は数百万度に達したと言われています。1秒後にはその火球は半径200メートルの大きさに急膨張し、強烈な熱線と放射線を放出しました。その熱線に焼かれた人々は重度の火傷を負って多くの人が亡くなりました。

## 原子爆弾投下時の真相

原子爆弾は、35万人が住む広島市上空、600メートルのところで爆発しました。爆発の瞬間、マグネシウムを焚いたような強烈な閃光が放たれました。

原爆が爆発した時の、爆発点の温度は数百万度となり、空中に発生した火球は、1秒後に直径400mを超える大きさになりました。

この火球から四方に出された熱線は、爆発0.2秒後から3秒後までの間、地上に強い影響を与え、爆心地周辺の地表面の温度は3,000度から4,000度にも達しました（鉄が溶ける温度が約1,500度です）。

爆心地から約1.2km以内でこの熱線の直射を受けた人は、体の内部組織まで大きな損傷を受け、ほとんどの人が、即死か数日のうちに亡くなりました。

原爆の爆発の瞬間、爆発点は超高圧となり、周りの空気が急激に膨張して、

街をすさまじい爆風が襲いました。

爆心地から半径2km までの地域では、ほとんどの木造の建物は壊され、鉄筋コンクリート造りの建物は、崩壊は免れた場合でも窓や家具などが吹き飛ばされ、その後内部は全て焼き尽くされました。

爆風によって吹き飛ばされ、即死した人、飛び散ったガラス片が刺さりけがをした人、たおれた建物の下敷きになって圧死した人や、そのまま生きながら焼け死んだ人がたくさんいました。

原爆の大きな特徴は、爆発した時のエネルギーがそれまでの火薬を使った爆弾とは比べものにならないくらい大きいことと、人体に危険な放射線を出すことです。

原爆が爆発して1分以内に「初期放射線」が大量に放出されました。特に爆心地から1km 以内で直接、放射線を受けた人は、ほとんど亡くなりました。

さらにそのあとも「残留放射線」が地上に残りました。

このため、援護活動や家族をさがすために爆心地近くにいき、放射線を受けました。爆発により巻き上げられたチリやススが黒い雨となって降り、放射性物質を直接浴びたり、井戸水が汚染されて健康被害を受けました。

原爆の被害は、被爆直後にあらわれた急性障害（発熱、はき気、下痢）だけではなく、後障害という長期にわたって白血病やガンなどさまざまな障害が現れ、現在なお苦しんでいる人も数知れません。

けれどもこの時、私達はまだ原子爆弾のことを知る由もありません。

## 地獄絵図の中の逃避行

布団を被ってみんなで死ぬつもりでしたが、外で「火災発生、退避、退避！」という声がしました。爆心地から2.5キロ離れた私たちの自宅周辺でも、あちこちで家が潰れ、朝食の準備で焚いていた火から火災が発生し、黒い煙が上がっていました。父が「今晚は野宿するようだ。お父さんは布団を裏の河原に運ぶから、みんな逃げろ」と言い、私たちは布団から出ました。

母が「照子が！ 照子が！」と私のところに飛んできました。私は頭がガン

ガンするけれども、自分では気がついていませんでしたが、顔中血だらけだったそうです。母は私の顔が潰れたかと思って一生懸命拭いてくれました。どうやら吹き飛ばされた時にどこかで打って、頭に大きな傷を負い、そこから血が出ていたようでした。母も背中に大きなガラスが刺さっていました。

外に出ると、家々は全て倒壊し、異様な静けさでした。「シーン」とした、まさに死の街でした。「泣かないで、ついてきなさい!」。母が3歳の弟をおんぶし、前を走ります。私は頭が痛かったけれど、5歳の弟の手を引き、歯を食いしばって一生懸命母の後を追いました。

走って走って山まで来ると、そこにはすでに10人、15人の兵隊さんが倒れていました。上半身大火傷です。夏ですから上着を脱いで作業していたのでしょう。皮膚がただれ、「苦しい、熱いよ、水くれえー」と呻いています。「水を飲んだら死ぬぞ」と誰かが叫んでいます。そんな地獄のような場所を、私たちは怖々と通って山へ逃げました。

空が暗くなったかと思うと、今度は大粒の雨が降ってきました。やがて叩きつけるような土砂降りとなりました。私たちはその雨でずぶ濡れになりました。これが、皆さんもご存知の、放射性物質に汚染された「黒い雨」です。そうとも知らず、私たちは雨に打たれながら、父がいる河原に引き返そうと、山を降りることにしました。

## 幽霊の行列と白いおむすび

己斐の橋に近づくと、市街地から逃げてくる人たちが、10人、20人、100人と見えてきました。埃にまみれ、髪は爆風で逆立ち、全身を火傷した人たちです。腕の皮膚が剥け、指先からダラリと垂れ下がっています。幽霊のように手を前に出して、皮膚を引きずりながら、無言で、泣きながらゾロゾロと歩いてくるのです。第二、第三の爆弾があるかもしれないという恐怖で、必死に逃げてくるのです。男女の区別もつかないくらいの酷い姿でした。

私たちはその橋を渡って逃げてくる人たちに逆行しながら河原に出ようとなりました。今も夢に見ますが、向かってくる人たちはまるで「幽霊の行列」のよ

うでした。

やっと河原に出て父と再会しました。私は家の中に吹き飛ばされたため火傷は免れましたが、家族全員吹き飛んだガラス片で怪我をして血を流し、大雨でずぶ濡れになり、途方に暮れていたところ、親戚の男の子（ショウちゃん）が水筒を一つ下げて探しに来てくれました。「ああ、助かった」と、私たちは親戚の家（己斐の紅葉谷）に避難することにしました。

夕方のことです。避難先の小川は、何事もなかったかのようにぎあぎあと流れ、ヒグラシが「カナカナカナ」としきりに鳴いていました。地獄のようなところから自然の優しさに触れて、とても嬉しかったことを覚えています。

日が暮れて、近所の人々が訪ねてきました。私の目は釘付けになりました。その人たちが差し出した「餅箱」（餅などを入れる木箱）には、真っ白いおむすびがズラッと並んでいたのです。夜でしたが、私にはそれが真っ白く光って見えました。朝から何も食わず、お腹はペコペコだったので、そのおむすびの美味しかったこと。白いご飯が食べられる幸せ。皆さんにとっては当たり前のことかもしれませんが、平和であればこそだと思います。

そのおむすびの美味しさは忘れられず、私は今も、炊き立てのご飯で、手のひらを熱くしながら誰かのために塩むすびを作ると、とても幸せな思いがします。

その夜、広島市の街地は夜空を焦がすように燃え続けました。子ども心に「ああ、燃えてる」と見ていましたが、あの日、あの炎の中で生きながら焼かれた人がいると思うと、本当にいたたまれない気がします。子どもを助けられなかった親、親を引っ張り出せなかった子ども。地獄のような苦しみの中で、被爆者は耐えて生きてきたのです。

## 校庭が火葬場に

8月9日になり、私たちの通っていた己斐国民学校に救護所ができたというので、父が怪我の酷かった私を連れて行って行ってくれました。校門を入ると、かつての桜吹雪ではなく、悲鳴とも呻きともつかないぎわめきが聞こえてきまし

た。背中を焼かれた人がうずくまり、真夏の太陽が容赦なくジリジリと照りつけ、むせかえるようなやけどの臭い、悲鳴、人を探す声で大混乱でした。

恐る恐る私の教室を覗くと、教室にも廊下にも、被災した人たちがギッシリと横たわっていました。死んだように寝ている人、「お母さん、お母さん」と泣き叫ぶ子ども。亡くなった人はすぐに急ごしらえの担架に乗せられて運動場へ運ばれていきます。私たちの運動場は、まさに火葬場と化していました。7筋ぐらいの穴が掘られ、亡くなった人を次々と放り込むようにして茶毘（だび）に付すのです。真夏ですから遺体はすぐに傷みます。だからどんどん火葬していくのです。

燃え盛る炎に真夏の太陽が照りつけ、黙々と作業する人の姿が陽炎（かげろう）のように揺れていました。人を焼くにおいが風に舞って、校舎全体を包んでいました。

そんな中、校門の近くに机が出され、白い紙袋がたくさん並べられていました。食べるものもなくお腹がペコペコだった私は、「お菓子を配っている」と思って飛んで行きました。そして、がっかりしました。袋の中身は「骨」だったのです。校庭で焼かれた人たちの骨が一片ずつ入っていました。「誰の骨かわからないけど、せめてもの供養に」と、家族を探しに来た人たちがその骨をもらって帰ったと、後に知りました。

私たちの校庭で焼かれた人は約2,000人と記録されています。その中には、「建物疎開作業」に従事していた中学1、2年生が多く含まれていました。建物疎開作業というのは、空襲で火災が起きた際、火が燃え移らないように、あらかじめ木造家屋を取り壊して空き地を作る作業です。中学1、2年生は毎日その作業に従事していました。「戦争に勝ったら学校に戻れる、勉強ができる、お腹いっぱい白いご飯が食べられる」。そう信じて頑張っていた学徒動員の子どもたち、約8,200人のうち、約6,300人が犠牲になりました。どんなに悔しかったことでしょうか。どんなに生きたかったことでしょうか。彼らは一瞬のうちに全てを失い人生を閉じてしまったのです。

## 忘れられない光景

原子爆弾といえば、いろんな悲しい光景を思い出します。私たちが避難した親戚の隣の家には、大火傷を負って帰ってきた女学生のお姉さんが寝ていました。真夏ですからクーラーなどありません。障子やガラスを全部開け放って座敷に寝ていたお姉さんの枕元に、小さな壺がありました。食べるものもなくいつもお腹をすかせていた私は、きっとその壺に飴玉が入っていると思って気になって仕方ありませんでした。ある時、お姉さんが壺の蓋を開けるのを見ました。なんと、お姉さんはその壺に「真っ黒い血」を吐いているのです。何度も何度も黒い血を吐き、やがて亡くなりました。

街の火が収まった頃、父と母は、父の学生時代の親友を親友の奥さんと共に探しに行きました。炎天下、瓦礫を掘り起こすためのシャベルを担いで、毎日毎日探しに行きました。道には黒焦げの遺体が累々と転がっています。それをまたぎながら、崩れた水道管から溢れるお湯のような水を飲みながら、友人の職場を目指しました。

1週間後、やっとその職場にたどり着いて瓦礫を掘り起こすと、白骨死体が出てきました。誰の骨かわかりません。しかし、一生懸命その周りを探すと、腰のあたりに焼け焦げた印鑑ケースが見つかりました。それは父が探していた「アワムラ」さん本人のものでした。泣き崩れる奥さんの声に驚いた、背中の赤ちゃんが泣き叫び、父も母も慰める言葉もなく立ち尽くしていたといいます。頭蓋骨だけを包んで持ち帰り、私たちは父の親友の変わり果てた姿に手を合わせました。描いてもらった絵を見ますと、無言のうちに訴えるものに胸を突かれる思いがします。

また、私は避難先の川にかかる橋でよく遊びました。ある夕方、むしろ（藁などで編んだ敷物）に巻いたものをかついだ男の人がやってきました。通り過ぎるのを待って見上げると、むしろの間から紫色に変色した子どもの足が覗いていました。「あれは山へ焼きに行くんじゃ」と、一緒にいた男の子が教えてくれました。亡くなった子どもをかついでいたのは、その子のお父さんだったのです。苦しみを背中に耐えて山へ消えていったお父さんの姿。一人一人に人

生があり、生活があった。それが一瞬のうちに奪われたのです。

## 終わらない苦しみ

その年の12月末までに、約14万人が亡くなったと言われています。しかし、原爆の被害はそれだけではありません。何年も何十年も経ってから症状が現れ、今も癌や白血病で苦しんでいる被爆者がたくさんいます。

私の中学・高校時代の友人、スエツグキミコさんもその一人です。彼女はとても明るく元気な子でした。彼女は8歳の時、爆心地から1キロの町で被爆しました。高校までは何の症状もなかったのですが、原爆から約16年経ったある日、腕に斑点ができ、高熱が出て、顔が腫れ上がりました。「胸に鉛を抱いたように苦しい」と言い出し、診察を受けると「急性骨髄性白血病」、原爆によるものと診断されました。

明るい彼女は「私、頑張るね。絶対良くなるね」と言って、輸血や点滴で一生涯懸命治療しました。彼女の言葉を私は今もはっきりと覚えています。「あの素敵な服とあの靴で、あの青空を仰いでみたい。そしてシンデレラのように踊ってみたい。私は誰にも文句を言うつもりはありません。よくなろう、生きよう、生きよう」そう懸命に願いましたが、約1年後、彼女は25歳の若さで亡くなりました。

また、私の夫の話もさせてください。今から12年前、私は「ピースボート」の被爆者地球一周証言の航海に参加しました。その時、夫が快く「行ってこい」と送り出してくれたのですが、彼自身も被爆者で、10歳の時、爆心地から2.5キロの場所で被爆し、辛い体験をしました。彼はその体験を誰にも話さず、私にさえ詳しくは語っていませんでした。

私が船に乗る前日、夫は初めて重い口を開きました。彼は被爆後、親戚を頼って避難の途中、爆心地に近い本川（ほんかわ）国民学校を通ったそうです。そこで、焼け焦げた校舎に、黒焦げになった子どもの遺体が数体、張り付いているのを見たというのです。それを助けに入った大人たちが、トビロ（先が曲がった道具）で遺体を壁から剥がしていたと。「そんな話は聞いたことも

ないし、記録にもありません」と人から言われたとき、「こんな可哀そうな話を、作り話でできるか」夫はそう言いました。残酷な記憶を持つ人は、一生口を閉ざしてしまふ。話すことができない被爆者がたくさんいることを、私は改めて実感しました。

## 世界への旅と平和への祈り

ピースボートで世界を回り、私は多くのことを学びました。私は「自分は被害者だ」という思いで船に乗っていましたが、シンガポールに行った時、そこで日本軍がかつて行った虐殺の歴史、加害の歴史に触れ、大きなショックを受けました。戦争になれば、人は加害者にも被害者にもなるのです。

また、長崎で被爆した大村和子さん（当時85歳）と同室になり、彼女の悲しい体験を聞きました。彼女は家族5人を亡くしました。17歳だった彼女は、手伝ってもらって、焼け跡で肉親4人を焼きました。「人の頭ってなかなか焼けないのよ」と淡々と話す彼女の姿に、言葉を失いました。そんな彼女は、晩年認知症になり、その凄惨な記憶を忘れて亡くなりました。「認知症は神様からの贈り物だった」と私は思いました。あんなに辛い記憶を抱えて生きることは、地獄だったからです。

アウシュビッツ収容所も訪れました。そこで見た大量の遺品、髪の毛、義足。ガス室の爪痕。証言してくれた生存者の方は、腕に彫られた番号を見せながら、「幼児がガス室に送られる時、引き裂かれた母親の半狂乱の叫びが今も耳に残る」と語りました。その言葉は、ヒロシマのあの悲しい叫びと重なり、私は涙で立ち尽くすしかありませんでした。

## おわりに：平和の種を育てて

世界では今も、戦争や内戦、紛争、テロ、飢餓、貧困、差別が絶えません。しかし、戦争は自然災害とは違い、人間の仕業です。一旦戦争が起きれば、敵も味方も人間性を失い、狂気の中で殺し合うことになります。

なぜ人間同士、国同士で戦うのでしょうか。武力でエスカレートするのではなく、もっと対話で解決する方法があるはずです。私たちはこの美しい地球に生まれ合わせ、国や言葉は異なっても、同じ時代を生きています。

あなたの愛する人は誰ですか？ あなたが守りたいもの、何があっても守りたいものは何ですか？ もし今、一発でも核兵器が使われたとしたら、人類は滅亡に向かいます。だから私は、この原爆の事実と記憶を伝え、二度と核兵器を使わせてはならないと世界に警鐘を鳴らし続けることが、生き残った私の使命だと思っています。

こんな若い、未来や夢のある皆様が、二度とあのような目に遭うことのないよう、心から願います。そして、皆さんの手で核兵器のない世界を築いていただきたいのです。一人一人の市民の思いが、国の指導者を動かす力になります。

どうか皆様、今日私が蒔いた「平和の種」を、必ず育ててください。育てて、核兵器のない平和な世界を築いてください。心からお願いして、私の証言を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

※本稿は2025年5月16日に創価大学で行われた講演の抄録であり、本稿で言及されているデータなどは当時のものです。

